



Title	松坂屋回教圏展覧会の周辺
Author(s)	重親, 知左子
Citation	大阪大学言語文化学. 2003, 12, p. 179-191
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/77957">https://hdl.handle.net/11094/77957</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 松坂屋回教圏展覧会の周辺\*

重親知左子\*\*

キーワード：イスラーム、タタール人、松坂屋

In 1939 and 1940, just before World War II, the first and only Islamic exhibition in Japan, the “Kaikyōken Tenrankai”, was held in Tokyo, Osaka, and Nagoya. Matsuzakaya, a well-established department store, offered its retail stores as the location for the exhibition. Why was a private store rather than a museum or a public facility selected for this type of exhibition, which should have been considered a matter of national policy? In this study we examine the circumstances and processes that led to Matsuzakaya’s involvement with this Islamic exhibition.

We will start by analyzing Nagoya’s role in the Islamic Exhibition. In 1931, after the Russian Revolution, the first mosque in Japan was built here by the Tatar refugees. This mosque happened to be near the head office of Matsuzakaya. Since Nagoya was an international city thriving on commerce, both the local government and the city residents believed that commercial and political ties developed through trade with Islamic countries would benefit Nagoya. Japan’s wartime regime also contributed to the desire to develop relations with Islam.

Secondly, we will look more closely at the Tatars, who were originally engaged in the textile industry in Russia. After immigrating to Japan, they continued to trade in textiles and related businesses. Because of the increased popularity of western-style clothes in Japan at this time, some of these Tatars were employed as tailors at department stores, probably including Matsuzakaya. These workers were typical of foreign Muslims in Japan before the second world war.

Finally, Matsuzakaya used cultural events hosted at its locations across Japan to simultaneously attract customers and improve its status among consumers. Matsuzakaya contacted Middle Eastern and Islamic cultures by promoting arabesque motif patterns and collecting pieces of cloth originally from these areas. We can be

---

\* The Circumstances and the Process Connecting Matsuzakaya and the Islamic Exhibition (OMOSO Chisako)

\*\* 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

fairly certain that Matsuzakaya supported the “Kaikyōken Tenrankai” in order to cooperate with the Japanese wartime government and to increase its customer base. During WW II many department stores including Matsuzakaya expanded overseas by order of this government. But after the war was lost, these companies suffered severe damage and the “Kaikyōken Tenrankai” disappeared into oblivion.

These factors together lead us to the conclusion that internal and external commercial and social forces in Japan before World War II, and the Tatar’s long history of textile expertise, linked Matsuzakaya with Islam.

## 1. はじめに

昭和 14 年（1939）11 月から 12 月にかけて東京・大阪の松坂屋、翌年 4 月には名古屋本店を舞台に<sup>1)</sup>、大日本回教協会・東京イスラム教団<sup>2)</sup>が主催した回教圏展覧会は、日本で実施された唯一のイスラーム博覧会である。当時の国策を反映したものとはいえ、この回教展が日本人のイスラームに対する関心をいくばくか高めたことは否定できない<sup>3)</sup>。

残念ながらこの展覧会に関する資料はそのほとんどが主催者側から発表されたものであり、またこれをテーマにした論文も見出せない。ただ注目されるのは、開催された場所が公共の美術館ではなく、百貨店の松坂屋であるという事実である。政治色の濃いこの回教展が、なぜ松坂屋という老舗の百貨店をその会場に選んだのか。その経緯を検討することにより、回教展を当時の社会背景の中でとらえ、太平洋戦争以前の日本のイスラームをめぐる状況の一端を明らかにしたい。

方法としては、日本最初のモスク（イスラームの礼拝所）があったとされる松坂屋発祥の地名古屋、戦前まで日本の外国人ムスリム（イスラーム教徒）を代表し、回教展に

<sup>1)</sup>松坂屋において回教圏展覧会に関する調査を行なった結果、生存する当時の関係者は見つからなかったものの、社内報や新聞『新愛知』（現中日新聞）への広告などから、名古屋でも 1940/4/4-11 の期間に展覧会が開催されたことが今確認された。

<sup>2)</sup>大日本回教協会は、昭和 13 年に「回教と諸民族の対策機関として、挙国総動員的団体を組織すべき」との声に応じて誕生し、初代会長には呼びかけ人の一人で前内閣総理大臣・陸軍大将の林銑十郎が選ばれた。政界・財界・軍部の協力のもとに生まれたイスラームの国策機関である。東京イスラム教団はイスラーム諸国と日本との友好を促進する目的で昭和 13 年に結成された。大日本回教協会が日本人のみであったのに対し、東京イスラム教団は外国人ムスリムもメンバーに含まれており、回教圏展覧会に付随して昭和 14 年 11 月には全世界回教徒第一次大会を開催している。

<sup>3)</sup>回教圏展覧会に関しては、拙論「平成 13 年度大阪大学言語文化研究科修士学位論文：日本イスラーム史理解のための一考察—山岡光太郎の歩んだ道—」の 49-50 ページを参照。展覧会の内容を簡単に説明しておく、美術工芸品の展示やイスラームとイスラーム諸国の説明、生活・風俗・習慣の紹介、経済・産業の紹介、付帯事業として小冊子や記念絵葉書の発行、中東・イスラームに関する芸術鑑賞会が行なわれた。入場者総数は大日本回教協会によると約 150 万人とされる。また展覧会に付随して、招待された外国人ムスリムの日本視察旅行や、イスラーム圏をめぐる貿易座談会も実施された。

も協力したタタール人<sup>4)</sup>、そして松坂屋自身の三者について調査し、一体何がイスラームと松坂屋を結びつけたのかを考察する。

## 2. 松坂屋と回教圏展覧会

これから松坂屋が回教展に会場を提供するに至った経緯を、名古屋市、タタール人、松坂屋の各サイドの事情をもとに追っていくこととする。

### 2.1 名古屋市の事情

昭和6年(1931)頃の名古屋には神戸モスク(1935)や東京モスク(1938)に先だって、すでに小さなモスクが存在していた。東京や神戸に比べると小規模ではあるが、ここには「名古屋回教徒団体」を結成したタタール人ムスリムによるコミュニティーが形成されていた。残念ながらこのモスクは昭和20年(1945)の空襲により焼失、ムスリムの多くは神戸等へ移住し、現在の名古屋モスクは平成10年(1998)に別の場所に建てられている<sup>5)</sup>。またこの最初の名古屋モスクの住所は、現在の名古屋市千種区今池3丁目16番地にあたり、一方松坂屋の本店の住所は、名古屋市中区栄3丁目16番地である。大正から昭和にかけて、バス・電車といった市民の足が名古屋市で発達したことや<sup>6)</sup>、松坂屋本店が「当時名古屋随一の高層建築物として名古屋城と肩を並べ」<sup>7)</sup>、昭和10年代以降は中部地方で最大の規模であったことを考慮すると、両者を隔てる距離は約3キロ程度に過ぎず、お互いの存在を知らなかったにはいかにも近すぎる。

松坂屋とムスリムの間で何らかの交流があった可能性は否定できない。最初のモスク跡に居住し、往年の状況に詳しい渡辺長十は昭和57年(1982)に次のように語っている。

「このモスクのあった一帯の土地は当初この県の知多郡のハタヤ(織物商)が所有していたものですが商売が巧くいかなくなって分譲した。私もその一区画を購入したが、この前の区画をある名古屋の人が買ってモスクを造りトルコ人〔タタール人〕に与えたようです。この奇篤な人物の氏名は亡妻のカギがよく知っていたようです。」<sup>8)</sup>

このコメントからわかることは、最初の名古屋モスク建立には日本人の協力があり、

<sup>4)</sup> “タタール”という呼称は、帝政ロシアでは16～19世紀までチュルク系ムスリム諸民族を指していたが、厳密にはヴォルガ・タタールとロシア帝国に分散したその末裔を意味する。ヴォルガ・タタールは、ヴォルガ中流域のブルガルを基盤に、10～13世紀に南シベリアから西へやって来たキプチャク系チュルクと混交して生まれ、イスラームやアラビア文字を採用した。19世紀まで“ムスリム”あるいは“ブルガル”と自称し、19～20世紀初めにかけてロシアにおけるイスラーム改革運動の中心となった(松原正毅・N I R A編『世界民族問題事典』平凡社、1995、649-650ページ)。

<sup>5)</sup> 名古屋モスクは40㎡の敷地の木造モルタル二階建て、イマームによる説教と集団礼拝が行なわれていた。小村不二男『日本イスラーム史』、日本イスラーム友好同盟、1988、298-302、304ページに詳しい。

<sup>6)</sup> 新修名古屋市史編集委員会編『新修名古屋市史 第6巻』、名古屋市、2000、604-611ページ。

<sup>7)</sup> 松坂屋60年史編集委員会『松坂屋60年史』、松坂屋、1971、59ページ。

名古屋におけるイスラームに対する態度は排他的ではなかったということである。昭和4年(1929)～昭和8年(1934)頃のモスクが存在した地域の住宅地図には、ロシア系を含む数名の外国人名が確認された<sup>9)</sup>。「今池のあたりには多くの外国人がいて、〔日本人はモスクを〕“ノア”または“ノワ”と呼んでいた」という証言もある<sup>10)</sup>。松坂屋のイスラームに対する態度もまた例外ではなかったと推測される。その根拠は2.3において述べるが、ここで名古屋という都市の国際性に注目したい。

第一次大戦後、ドイツ軍俘虜の収容所が名古屋にも作られ、大正4年(1915)～9年(1920)にかけて約500人の俘虜が収容された。彼らの技能を伝えるために「俘虜製作展覧会」が大正8年(1919)に中区門前町の愛知県商品陳列館で開催され、入場者は約10万5000人にのぼったという。また労働力不足を補うため、俘虜たちは名古屋市内の紡績・機械等の工場での労役にも従事し、日本人労働者や技術者に大きな刺激と覚醒を与えた<sup>11)</sup>。名古屋市史(2000)には、次のように記されている。

「名古屋収容所の実態からは、敵国ドイツに対する敵意は見られず、むしろ先進国ドイツに学ぼうとする後進国日本の敬意と友好的態度を読み取ることができる。なお、ドイツ政府は、名古屋市民の厚遇に対し、〔大正〕一〇年に市民に感謝状と市民の代表としての当時の市長にプロシア国赤十字賞を送っている。」<sup>12)</sup>

これ以外にも名古屋市の国際性を示すものとして、名古屋市が主催した「名古屋汎太平洋平和博覧会」を挙げることができる。これは昭和15年(1940)に開かれる予定であった万国博に先だって外国を招待するわが国で初めての計画と位置付けられ、昭和12年(1937)3月から5月にかけて市内南区の臨港地帯15万坪(約50ヘクタール)を会場とし、480万人程度の入場者があった。前掲市史によると「名古屋市がこの事業を行なうのは、市人口が100万を突破し、産業も隆昌にあつて『優ニ三都ト併称セラルル所』となったが、昭和一二年は名古屋港開港三〇周年にあたり、また名古屋港の第四期修築の完成、東洋一といわれた名古屋駅の新築と国際飛行場・国際観光ホテルの竣工が予定されて『国際都市』としての市容が現れるのを機とするものであった。」<sup>13)</sup>

そしてこの博覧会の特徴は、以下のようにまとめられている。

「〔……〕イデオロギー性は避けられなかったとはいえ、この名古屋博覧会は太平洋地域と『平和』とをシンボルに掲げた事業として特記されてよいものと思われる。たとえ

<sup>9)</sup>小村、前掲書、301ページ。

<sup>10)</sup>『名古屋市居住者全圖』(昭和4年 昭和8年調 複製本)、1938を参照。

<sup>11)</sup>名古屋において戦前のイスラームに関する調査を行なった結果、今池の住民や郷土史家によるこのような証言を得た。

<sup>12)</sup>名古屋市、前掲書、92-97ページ。

<sup>13)</sup>同上書、95-96ページ。

ば、やがて敵性語として日常語のなかの英語が禁止され排除されていくのに、この平和博覧会では、外国のお客を迎えるために、芸妓の英会話講習会が開かれていたのである。」<sup>14)</sup>

このように、ドイツ軍俘虜収容所や名古屋汎太平洋平和博覧会を通して名古屋市はその国際性に磨きをかけるが、そこには外国に対する排他性は見られない。博覧会を積極的に開催し、外国文化の摂取に意欲的なその姿勢は、イスラームに対しても同様であったと思われる。その理由の一つとして、経済界からの働きかけが挙げられる。

昭和15年4月に名古屋松坂屋で行なわれた回教圏貿易座談会<sup>15)</sup>において、名古屋市助役三樹樹三は以下のように語っている。

「〔……〕大阪に於ける貿易座談会のパンフレットを拝見致しますと、大阪に於きましては回教圏に對する貿易が八〇%といふことで、其の大きなことに驚いたのであります。

〔……〕名古屋はどうであるかと調べてみたのでありますが、それに依つて、輸出に就きましては四〇%、輸入に就きましては四二、三%が回教圏に對するものであります。さういふ點から考へて見ましても、此回教圏諸国と、今後ますます親善なる關係を持續して参りますことは、當地としても非常に大切なことと考へるのであります。〔……〕精神的には相互よく知り合ふということが非常に大切ではないかと考へるのであります。」<sup>16)</sup>

同じ座談会において、名古屋印度雜貨輸出組合・中部日本南洋雜貨輸出組合の笹山眞一は次のように語っている。

「愛知県及び名古屋市としては回教方面への輸出といふものは、阪神と比べると非常に少い。〔……〕其點まだまだ名古屋としては伸びる力を多分に持つてを。今後かういふ回教協會のやうな團體の活動に依つて向ふの事情がよく分り、商品がどんどん出て行くやうになれば非常に結構だと、其點大いに希望してをります。」<sup>17)</sup>

ここからわかることは、名古屋においてイスラーム諸国との貿易促進が急務であり、また官民を挙げて交流促進が希望されていたということである。日中戦争(1937)の勃発を背景に、各種法令によって貿易と国内商業は軍需資材の供給確保を最重要課題として統制が強化されていった。軍事物資の輸入のためには外貨が必要であり、輸出の拡大が求められた。名古屋市は昭和11年(1936)に貿易斡旋所を開設、カルカッタ・カサブランカ・シカゴ等の都市に海外貿易通報員を設置した。その後昭和13年(1938)には、名古屋近東アフリカ輸出組合や中部日本南洋雜貨輸出組合を設け、中南米・近東・ア

<sup>13)</sup> 同上書、613 ページ。

<sup>14)</sup> 同上書、612 ページ。

<sup>15)</sup> 注3で説明したとおり、回教圏貿易座談会は回教圏展覧会に付随して大阪では昭和14年12月に、名古屋では昭和15年4月にそれぞれ松坂屋において実施された。政財界の関係者が出席して、中東諸国の情勢や風俗習慣、貿易経験談や文化工作の必要性などが話し合われた。前掲拙論50-53 ページ参照。

<sup>16)</sup> 「回教圏貿易座談会」大日本回教協会調査部『回教世界』、1940/6、39-40 ページ。

リカ市場の開拓を目指したのである<sup>18)</sup>。こうしたことから、名古屋経済界の重鎮である松坂屋がこの座談会に会場を提供し、回教圏展覧会に積極的に関与したのも当然と言えるであろう。

## 2.2 タタール人の事情

19世紀以降東清鉄道の建設にもなってタタール商人は東方に移動し、ハルビンが故郷と遠隔地を結ぶ彼らの拠点都市となった。そこに1917年のロシア革命が勃発しこれまでの商業活動が破綻、新天地を求めて日本への移住が始まった。この様子を大久保幸次(1924)は次のように描写する。

「それで、我が国も、かういふロシアの御客様を澤山迎へることになったが、かうした亡命ロシア人の中でも、一端目立つた異民族の大きな、纏つた群れのあることに気がつくであらう。彼等こそは、はるばるロシアから来た回々教徒の避難民〔……〕トルコ・タール民族であるのだ。かういふ変つた避難民の群れが大正十年頃から日本の諸都市にぼつりぼつりその姿を現はすと、初めて不意にこんな珍らしい訪問客に接した日本人は驚異の眼を見張った。何故なれば彼等は例外なしに、洋服地の行商となつて日本全国津々浦々に至るまでその不思議な姿を表はしたからである。」<sup>19)</sup>

大久保の説明を補うものとして、鴨澤巖(1983)が外務省外交資料館所蔵の資料から編集した、1927年の警視庁管下の在留露国人職業リストが挙げられる。それによると、掲載されている鞆鞆人〔タタール人〕31名全員が羅紗行商となっている<sup>20)</sup>。

なぜこれほど洋服地の行商が多かったのか、その理由を鴨澤は次のように分析する。

「十八世紀、タタールはロシアの工業化に積極的な役割を演じていた。一七五〇年から一八〇〇年にかけてタタールの企業家はカザン近傍にいくつかの繊維産業の工場を建設したが、一八一四年現在ではタタール企業家によるこれらの工場は全ロシアの繊維製造業の七五%に相当していた。」<sup>21)</sup>

その後もロシア革命が起こるまで、タタール人の繊維業を中心とした経済活動は活発であり、亡命先で糊口を凌ぐために祖国から持参した布地や毛織物を売っていたのである。

また日本の方でも、洋服生地に対する需要が年々増え始めていた。その状況を松坂屋

<sup>17)</sup> 同上論文、52-53 ページ。

<sup>18)</sup> 名古屋市、前掲書、609-670 ページ。

<sup>19)</sup> 大久保幸次「日本へ来たロシア回々教徒避難民について(一)」国際聯盟協會『国際知識』、1924/2、96 ページ。なお、大久保はトルコ・イスラーム研究者で、昭和13年に回教圏研究所を主宰した。

<sup>20)</sup> 鴨澤巖「在日タタール人についての記録(二)」法政大学文学部紀要、1983、252-253 ページ。

<sup>21)</sup> 鴨澤「在日タタール人についての記録(一)」法政大学文学部紀要、1982、32 ページ。

社史（1971）は次のように説明する。

「呉服店が百貨店に転換する機運は日清、日露両戦役の好況がもたらしたものである。両戦役の軍需景気に続出した大小成金のおう盛な購買力によって資本が蓄積された。のれんを誇る呉服店の多くは、長年の信用を背景にこのとき勢いよく成長した。外国文化の流入と日本資本主義経済の発達が大きな要因であった。欧米文化が流入するにつれ、呉服店の店頭にも洋服商品が姿を見せ始め、生活の向上とともに商品は多様化し、流行が生まれていった。」<sup>22)</sup>

第一次世界大戦後になると、既製服業界が困惑したのは「中級品に位して既製服の材料に適するドイツ人の手による毛織物の輸入が途絶したことであった。」<sup>23)</sup> それ以外にも関東大震災（1923）により、「東京に於ける生活の急變の結果として、洋服地や洋服の需要が激増した。」<sup>24)</sup> 疎開先のこのような事態から、行商から洋服店主になったタタール人も少なくなかった。そのような中で、百貨店もタタール人を必要とする。1927年生まれで現在も神戸に在住する、神戸回教協会会長やイマーム（礼拝の指導者）も務めたタタール人フレッジ・キルキーは以下のように回想する。

「神戸のトア・ロードにはタタール人の立派な店が三、四軒あり、『そごう』の仕立てを一手に引受けていた婦人もあった。」<sup>25)</sup>

神戸のトア・ロード沿いの曲がり角に神戸モスクが存在し、百貨店そごうとモスクの距離も1キロ足らずである。これは2.1で述べた松坂屋と名古屋モスクの関係とよく似ている。当時名古屋で百貨店として独占状態にあった松坂屋の洋服の仕立てを、遠くない距離にコミュニティーを持つタタール人が手伝っていた可能性は否定できない。

こうして洋服生地を仕入れるのに便利だとして、繊維問屋の多い東京・大阪近隣や、神戸・横浜といった港のある地域にタタール人のコミュニティーが作られていった。タタール人の故郷のように繊維業が盛んで、小売商が多い土地柄である名古屋も例外ではなかった<sup>26)</sup>。第一次大戦後は機械化の進展や輸出の急増により繊維工業が飛躍的に成長、昭和に入ると羊毛の輸入は日本一となった<sup>27)</sup>。タタール人はこれらの地域に生活の場を見つけ、モスクを建て、ムスリム・コミュニティーを広げていった。彼らの数は数百人に及び、当時の日本における外国人ムスリムを代表する存在であった<sup>28)</sup>。ここに、洋服

<sup>22)</sup> 松坂屋、前掲書、36 ページ。

<sup>23)</sup> 日本繊維協議会編『日本繊維産業史』、繊維年鑑刊行会、1958、916 ページ。

<sup>24)</sup> 大久保「日本へ来たロシア回々教徒避難民について(二)」国際聯盟協會『国際知識』、1924/3、119 ページ。

<sup>25)</sup> 鴨澤、「在日タタール人についての記録(二)」、236 ページ。

<sup>26)</sup> 新修名古屋市史編集委員会編『新修名古屋市史 第5巻』、名古屋市、2000、438-440 ページ。

<sup>27)</sup> 名古屋市、前掲書、312 ページ。

<sup>28)</sup> 鴨澤、前掲書、228-229 ページ。

とイスラームを結ぶルートが明らかになる。同時に両者に絡む存在として、百貨店松坂屋の姿が浮かび上がってくる。

### 2.3 松坂屋の事情

西欧列強諸国と肩を並べるために明治時代に日本が目指したのは、富国強兵・殖産振興であった。このために産業近代化が急務となり、政府は明治2年（1868）に通商司を設置、その下に通商会社と為替会社を民間に経営させた。

松坂屋の前身で尾張藩御用達「いとう呉服店」の14代当主伊藤祐昌は、名古屋藩通商会社の初代総頭取に選ばれ、その後明治7年（1874）に名古屋で開かれた勸業博覧会の発起人・開設係となった。明治11年（1878）には名古屋勸業博物館（愛知県商品陳列館の前身）の初代館長に就任、開館時には明治天皇の先導を務めるなど、公職活動に努力を惜しまなかったとされる<sup>29)</sup>。伊藤のこの姿勢は、2.2で説明したように、日清・日露戦争後に急成長した当時の日本の百貨店事情を裏付けている。すなわち、この百貨店「創設期」が自身の活動期と一致した伊藤は自社のステイタス向上と集客増を目指して、公職や博覧会に熱意を傾けたと言える。伊藤に率いられた松坂屋は、その後展覧会を通してこの姿勢をより積極的に打ち出していく。その背後には次のような社会事情があった。

「百貨店が大衆の中に融け込んでいくにしたがって、宣伝活動が花やかに展開されていくようになった。なによりもその活動を活発にしていたのは、各百貨店が〔関東大〕震災の復興を契機に増築、新築を重ね目覚ましく発展し競争が激化したことにある。引き続き不況の中で、需要を喚起する効果的な商品催事の企画が必要であったうえ、文化催事も大型化し、回数も増加し、目新しさが求められていた。〔……〕このころから宣伝機能の重要性が自覚されはじめたのである。」<sup>30)</sup>

松坂屋と同じく老舗の百貨店三越も、展覧会に熱心であった<sup>31)</sup>。松坂屋による催事の実例を挙げると、海外旅行展・映画スター展や松坂屋管弦楽団公演、皇族や内外の武官を迎えた陸軍展などがある。その他にも月刊宣伝誌が発行され、松坂屋宣伝部の活躍は華々しかった。「〔……〕文化的企画のほか新聞の宣伝でも、昭和5年（1930）ころ

<sup>29)</sup> 松坂屋、前掲書、25ページ。

<sup>30)</sup> 同上書、63ページ。

<sup>31)</sup> 株式会社三越『三越のあゆみ』、1954、の「学俗協同」によると「〔……〕日本画、洋画、工芸の展覧会をはじめ、諸外国の美術工芸展覧会をしばしば開いて、美術を大衆に普及すると共に、海外文化の紹介に努め、更に歴史、芸能、スポーツ、衛生其他各方面の知識を普及する展覧会を開いて、社会教育に役立てました。明治以来の三越名物の児童博覧会、各地名産紹介の展覧会、華道、写真等の展覧会も、三越と社会とのつながりを次第に深めました。」（注：この本にページ数はつけられていない。）

から広告量が全国で首位となるほど意欲的な活動を展開した」<sup>32)</sup>とされる。名古屋店宣伝部長刈田貞一郎は、先に述べた回教圏貿易座談会において以下のような発言をしている。

「新聞の話で思ひ付きましたが最近宣傳の爲の展覧会といひますか、ドイツの宣傳のための展覧會、ああいふもので一般大衆にドイツを知らせるのもいいことですが、又回教圏に日本を知らせるための持運び展覧会をやられることもよい方法だと思ひます。さうして現在の日本といふものを回教圏の国々に知らせることも必要だと思ひます。」<sup>33)</sup>

このように宣伝と集客術において、当時百貨店業界ナンバーワンであったことが、回教展を松坂屋で開催する原因の一つとなつたのではなからうか。その経験と手腕に大日本回教協会が期待したところが大きく、また松坂屋もエキゾチックな回教展による宣伝効果を少なからず狙っていて、両者の思惑が一致したのであろう。

他方、呉服店から始まる松坂屋は服飾分野の展覧会にも力を入れていた。昭和9年(1934)には大阪店で世界服飾文化博覧会を開いている。このあたりの事情を説明するものとして、前掲社史から次の部分を引用する。

「松坂屋が服飾流行について統一した主張を始めたのは、古く大正12年にさかのぼる。その年いとう呉服店意匠部は新サラセン模様を染色品に応用することを唱え、それから3年間にわたってこの模様が流行の先端を切った。その後、大正14年の秋から、毎年秋冬と春の二回独自の模様と流行色を発表し、それを生かした着物の陳列会『流行会』を共通催事として開催してきた。出発当初は呉服が対象であったが、昭和5・6年ごろから雑貨、婦人服、紳士服、子ども服などが加えられていって、昭和8年5月には婦人服と紳士服の『夏の雑貨サロン』が開催され、初のファッションショーが上野店で開かれた。〔……〕ファッションショーは翌9年春から名古屋・大阪でも開かれたが、当時の人気歌手や俳優芸者などを動員してたいへんな好評を博した。〔……〕昭和12年からは、本社に外国課がつくられ、パリのラファイエット百貨店、サンフランシスコのエムポリウム百貨店と交換陳列会を開催し、松坂屋からは伝統の訪問着を送り、先方の婦人服・紳士服や洋品類をショーウィンドーに陳列するなどファッションへの努力が続けられた。」<sup>34)</sup>

ここでは、松坂屋が当時の日本におけるファッション・リーダーとなるに至ったプロセスが述べられているが<sup>35)</sup>、一つ注目されるのは、「新サラセン模様」という言葉である。この中の「サラセン模様」とは「アラベスク」を意味すると考えられ、その特徴は曲線と幾何模様の交差やアラビア文字と唐草模様との組み合わせにある。自然物の描写を避けるイスラーム文化に特有とされ今日に至るまで世界中の建築や装飾に応用されて

<sup>32)</sup> 松坂屋、前掲書、63ページ。

<sup>33)</sup> 大日本回教協会調査部、前掲論文、57ページ。

<sup>34)</sup> 松坂屋、前掲書、78-79ページ。

<sup>35)</sup> 名古屋市、前掲書、330ページ。

いるが<sup>36)</sup>、これをモチーフにした柄を流行らせたという事実には、松坂屋とイスラームの浅からぬ縁を見出すことができる<sup>37)</sup>。昭和6年(1931)には「染織参考室」が設置されたが、その収集品の中には古代エジプトのコプト裂やペルシャ裂が含まれている<sup>38)</sup>。これらの事実には、松坂屋と中東・イスラーム文化との接点を見出すことができ、両者が接近するのは自然な流れであったと言えるかもしれない<sup>39)</sup>。

このように百貨店業界の雄として成長する松坂屋であったが、時代の波を避けることはできなかった。日中戦争の頃から日本の経済進出が活発化し、昭和13年には商工省が百貨店にも大陸進出を要請した。太平洋戦争が始まると、南方占領地の経済開発のために民間企業の進出が促された。その間の事情は以下の通りである。

「こうした国策による要請があった一方、統制経済が進展する戦時体制下では百貨店無用論が飛び出すほどで、時の経営陣は百貨店企業の将来を占って苦慮を深くしつつあるときでもあり、大陸に企業の新しい将来を開く可能性が求められることになったのであった。要請に応じて、松坂屋をはじめ、高島屋、大丸、白木屋、十合などの百貨店が海を渡った。松坂屋は中国に活動基盤を開拓し、太平洋戦争開始後は、遠く東南アジア地域に進出して新事業を行なった。」<sup>40)</sup>

「百貨店無用論」を打ち消すためには、百貨店業界が積極的に国策に協力するしかない。当時の松坂屋にとって、回教展への会場の提供は願ってもない自社の存在アピールの機会であったろう。大阪店で回教展の8ヶ月前に「日本精神宣揚 建武中興大展覽会」が開催された事実もこれを裏付けている<sup>41)</sup>。

しかしながら太平洋戦争期には、物資の不足や売り場供出などの理由で、百貨店業界は次第に手も足も出ない状態に陥った。「この間多くの百貨店は活路を大陸や南方に求めて、新事業を開拓していったがけっきょく企業の永続的な支えとはならず、空襲の激化とともに内地の店舗は焼失、1945年(昭和20年)8月15日の終戦を迎えたとき外地の

<sup>36)</sup> 田中千代『服飾事典』、同文書院、1969、334ページ。

<sup>37)</sup> 三越、前掲書の「元禄模様」によると同じく呉服店から発展した三越の、服飾流行に関する動きは次のようなものであった。「明治三十八年、新発足と共に三越が唱えた『元禄模様』は江戸の文化の美しさを復活し、新曲舞踊、歌舞伎を通じて興味深く宣伝して、大いに歓迎されました。[……] 明治の末、世相の変化と共に、風俗は著しく洗練されて行きましたが、三越はその動きに応じて、桃山時代の気風を反映した『凱旋記念桃山模様』…尾形光琳の画風を近代化した『光琳式明治模様』、平安時代の装束調度の図案を移した『新有職模様』を唱え [……]」ここには、日本の伝統文化をモチーフにする三越の服飾流行における特色がみられる。

<sup>38)</sup> 松坂屋、前掲書、68-69ページ。

<sup>39)</sup> 昭和35年(1960)5月に、上野店で創立50周年記念として「トルコ古美術展」が開かれ、当時の天皇・皇后が来店した事実を指摘しておく。松坂屋70年史編集委員会『松坂屋70年史』、松坂屋、1981の口絵写真参照。

<sup>40)</sup> 松坂屋、前掲書、91ページ。

<sup>41)</sup> 松坂屋編『日本精神宣揚 建武中興大展覽会 記念帖』、松坂屋、1939を参照。

資産はいっさい凍結され、被災した店舗を残すのみとなった。」<sup>42)</sup>

このような悲惨な結末を迎えた戦前の百貨店による海外進出においては、松坂屋が最も広範囲かつあらゆる事業に着手していた。松坂屋作成の資料によると、地域的には大陸の華北・華中・華南から東南アジアのマライ・スマトラ・ジャワまで、業種については小売業から油脂会社・煙草会社・食品工場やホテルまで列挙されている<sup>43)</sup>。その傷の深さがどれほどであったかは、以下の松坂屋の告白により明らかである。

「昭和12年7月から20年8月までの8か年の歳月は、長い歴史からみればわずかにすぎないが、松坂屋の受けた深刻な影響、打撃の大きさは、会社の存立すら危くした激動の8年であった。その意味で盧溝橋の一発の銃声はまさに松坂屋にとって、苦難の道の開幕を告げる号砲の響きでもあった。」<sup>44)</sup>

松坂屋の社史を数冊調べてみたが、回教展に関する記事は見当らなかった。前掲社史の最初のカラーページの部分に回教展のポスターが掲載されているのみであった。日本で唯一のイスラーム博覧会で、「松坂屋としてもあらゆる意味に於て十餘年来の大展覧會であった」<sup>45)</sup>とされる回教展に関する記事がないのは、松坂屋が当時の政治体制にのみこまれた苦い経験をあえて掘り起こさなかっただけでなく、回教展が当時の国策による強制の一面を持っていたことを示していよう<sup>46)</sup>。

### 3. まとめ

回教園展覧会が松坂屋で行なわれるに至った経緯を探ってきたが、結果として名古屋・タタール人・松坂屋の三者が、イスラームと洋服を通してつながっていたことがわかった。松坂屋の本拠地名古屋にはこれまで確認されている日本で最古のモスクがあり、外国人ムスリムも少なくなかった。国際性に富む名古屋ではあったが、太平洋戦争期にはイスラーム圏との貿易額で阪神地域に及ばず、官民を挙げてイスラーム諸国との交流・貿易促進が望まれていた。一方大正期にロシアから亡命してきたムスリムであるタタール人は、故国での生業ともいうべき繊維業を通して東京・神戸・名古屋などを中心に日本に定着した。日本で洋服の需要が伸びる時期に遭遇し、仕立てなどを通して百貨店と

<sup>42)</sup> 同上書、81 ページ。

<sup>43)</sup> 同上書、96、98 ページ。

<sup>44)</sup> 同上書、81-82 ページ。

<sup>45)</sup> 加藤久編『記録 回教園展覧會 世界回教徒第一次大會/来朝回教徒視察團』、大日本回教協会、1940、18 ページ。

<sup>46)</sup> 大日本回教協会の後身の一つで、宗教法人「日本ムスリム協会」(1952年結成)の初代副会長渡辺正治氏に関して興味深い事実がある。氏は昭和21年(1946)に丹青社(主に博覧会・見本市・展示会等のディスプレイを請け負う会社)を創立し、日本ムスリム協会の事務所は当初この丹青社内にあった。生前の氏を知る協会前会長五百旗頭陽二郎氏の証言によると、ムスリムであった渡辺氏は松坂屋のディスプレイを専門に担当していたという。

の関係を持つ者もいた。彼らは戦前の日本の外国人ムスリムを代表する存在であった。また松坂屋は、集客とステイタス向上の一環として文化的な催事に積極的であった。服飾に造詣の深い松坂屋がアラベスクをモチーフにした柄を流行らせたり、中東の布地を収集していた事実には中東・イスラーム文化との接点を見出すことができる。時代の流れによって百貨店は海外進出を余儀なくされ、松坂屋も国策への協力と集客を兼ねて回教展に協力したが、終戦とともにすべては瓦解し、展覧会の存在も忘れ去られていった。つまり、当時の内外の社会背景が松坂屋とイスラームの両者を接近させ、その主な仲介役が洋服を取り扱うタタール人であったと言えるだろう。

このように百貨店松坂屋で回教展が開かれた事情を分析していくと、タタール人や服飾関係など太平洋戦争以前の内外の社会情勢が複雑に絡んでいる。戦前の日本のイスラームをめぐる状況の観察から、今後も興味深い事実が見つかる可能性は高いと思われる。

[後記] 本研究を行なうにあたり、資料収集に関して松坂屋本社秘書室の菊池満雄氏と名古屋市立鶴舞図書館の安井昭司氏にご協力をいただいた。この場を借りて心から感謝申し上げたい。

#### <主要参考文献>

- 大久保幸次「日本へ来たロシア回々教徒避難民について(一)」国際聯盟協會『国際知識』, 1924/2, 96-108 ページ.
- 大久保「日本へ来たロシア回々教徒避難民について(二)」国際聯盟協會『国際知識』, 1924/3, 108-119 ページ.
- 加藤久編『記録 回教圏展覧会 世界回教徒第一次大會/来朝回教徒視察團』, 大日本回教協会, 1940.
- 株式会社三越『三越のあゆみ』, 1954.
- 鴨澤巖「在日タタール人についての記録(一)」法政大学文学部紀要, 1982, 27-56 ページ.
- 鴨澤「在日タタール人についての記録(二)」法政大学文学部紀要, 1983, 223-302 ページ.
- 小村不二男『日本イスラーム史』, 日本イスラーム友好同盟, 1988.
- 新修名古屋市史編集委員会編『新修名古屋市史 第5巻』, 名古屋市, 2000.
- 新修名古屋市史編集委員会編『新修名古屋市史 第6巻』, 名古屋市, 2000.
- 大日本回教協会業務部「明日の世界勢力 回教圏展覧会—開催と盛況と成果に就て—」大日本回教協会調査部『回教世界』, 1939/12, 87-101 ページ.

大日本回教協会「回教圏貿易座談会」大日本回教協会調査部『回教世界』, 1940/6, 37-61  
ページ.

松坂屋 70 年史編集委員会『松坂屋 70 年史』, 1981.

松坂屋 60 年史編集委員会『松坂屋 60 年史』, 1971.